

Ⅲ. ジョージタウン大学社会正義研究・教育・活動センター

Center for Social Justice Research, Teaching & Service, Georgetown University

1. 社会正義研究・教育・活動センターの概要

1) センターの使命

センターの使命 (Community based Learning for justice) は、ジョージタウン大学のミッションに深く根付いている。本センターにおけるサービスラーニングの定義は、クリントン政権時代に制定された「全国および地域サービス信託法」(1993年)によって規定され『正義と公益を増進するために、多様なパートナーや地域との協働による地域密着型の研究、教育、そして活動を推進しそれらを融合する』をセンターのミッションとして示し、2001年に設立された。

2) 社会正義のための地域密着型学習 (Community-Based Learning for Justice : CBL)

(1) CBLのねらい

体験学習、サービスラーニングを発展させた概念は「社会正義のための地域密着型学習」である。

地域密着型学習として、その学びの特徴は3つある。1つめは、社会正義から阻害されている人々と共に学ぶという点である。2つめは、地域が教育のパートナーであること。そして、3つめは、地域社会における学生の主体的な活動を通じた学びである。

(2) CBLを履修するメリット

学内で3年間の議論した結果、学部長が承認した「CBL」は、サービスラーニングを取り入れた科目を総称する記号として、科目名の最初に統一的につけるようになった。

CBL科目の単位を取っていると、大学院の進学面接などでは、ユニークな学習を履修していると面接官の目に留まり質問されたり、この科目を通じた活動が評価につながるというメリットがある。

CBLを通して身につける技能(プロジェクトの企画、助成金の申請等)は、非営利団体で働く際に役に立ち、就職の際にも、非営利団体からの評価が得やすくなる。求められる良き企業市民として、営利企業から良い評価を受けることができる。

(3) CBL教科の導入現状

現状では、全学全科目において、CBLを取り入れている科目は1%に満たない。主専攻または副専攻科目として、「正義と平和」、「社会正義」、「女性とジェンダー」、「国際開発」の1科目を履修することを必修にしている。

各学部では、最低1科目はCBLを取り入れたコースをつくる方向で検討されている。

(4) CBL の評価

プログラム評価は、どのような人材を育て、学生に何を身につけさせたいか、大学としての教育目標が評価の観点になる。

この評価は、教員による評価、活動先担当者による評価（責任感、コミュニケーション等）、学生による活動先の評価（提案）、学生自身の自己評価を組み合わせ評価している。

学生による活動先の評価は、その活動先がよい学習の場であったかどうか、教員にも分かり、お互いの学習目標のゴールを見極めることができる。

学生による活動先の評価（提案）として、①どのようなスーパーバイズを受けたか、②受け入れ先が今後、より良い体験ができる用になるためにはどうしたらよいか、③教室で学んだ理論との関連性について学ぶ事ができたかどうか等がある。

今後は、CBLを経験した学生が卒業後に、この経験をどのように生かしているかを調査研究していかなければならない。

(5) CBL とサービスマーケティングの違い

基本的には共通のものとして考えているが、相互利益の関係が築かれているのがCBLである。

サービスマーケティングは、誰かを援助してあげると一方通行に陥りがちな側面もあり、学生の学習の到達度によっては、必ずしも相互利益ではない場合もあることを認識している。

(6) CBL とインターンシップの違い

CBLの対象者は、社会の中で優位な立場に置かれていない人たちも対象としている。

インターンシップでは、企業スキル開発トレーニングを受ける等、主としてビジネス界に進む学生が多く、ビジネスプランや申請協力として非営利組織に関わることが多い。

CBLでは、地域生活の中で対象者をどのように援助していくのか、学生自らがどのように行動をとることを求められているのかを考えるプロセスが含まれている。

(7) 活動先との調整

地域には、多くの活動先団体が存在しているが、活動先団体がどこの大学と提携しているかは、センターで情報を把握して調整している。

3) サービスラーニングを導入する上でのアドバイス

サービスラーニングを導入する際は、5年先を見通した構想と戦略を考えておくことが必要である。サービスラーニングは、大学の教育改革としては重要な戦略ではあるが、従来の大学教育のあり方に固執する教員達からは反対されることが多い。従って、学内における味方と敵を見極めること、敵を味方にするのが大事である。

1985年に、全米大学にサービスラーニングを導入することを目的に、Campus Compactを立ち上げた。ジョージタウン大学は全米25本の指に入る優れた大学ではあり、この4大学の一つにジョージタウン大学は入っていた。しかし、導入の際には、教員の教育実践や蓄積があったにも関わらず、その取り組みを合意するに至るまで大変な作業を要した。

大学教育にCBLを導入するということの合意や、アイデンティティがなく、実際の導入にあたって、各教員の教育実践や研究として蓄積されてきたCBLの活動や視点をまとめたのが、このセンターであり、大学内においてこのようなシステムを構築していく際の一つのモデルになったと言える。

【説明者の紹介】

■キャスリン・マース・ウィガート教授 (Prof. Kathleen Maas Weigert)

社会正義研究・教育・活動センター所長／社会学・人間学・正義と平和プログラム担当教授



■ジェーン・カーシュナー (Ms. Jane Kirchner)

地域密着型学習・正義と平和プログラム担当コーディネーター

2. CBL を導入した教員からの報告

【説明者の紹介】



■アリサ・カース准教授 (Prof. Alisa Carse)
哲学科准教授

■ディエナ・クック (Deanna Cooke)
社会正義研究・教育・活動センター研究部長



1) アリサ・カース准教授の担当教科と CBL

(1) 導入科目と学習内容

『責任』『回復力』『自尊心』がある。

道徳心や責任感は、どのように学ぶことができ、どのような場合に無くしてしまうものなのかについて学ぶ。また、「自律性と傷つきやすさ」をテーマに、問題を抱えた子どもたちと接する社会活動と関連づけたレポートを毎週書かせている。

地域密着型活動として、放課後学習指導活動 (ASK: After School Kids Program) として、学校での国語指導、家庭教師、刑務所での識字教育などに取り組んでいる。

活動先は、社会正義研究・教育・活動センターが開拓して紹介してくれる。活動先では、活動の経験を積んだ学生達からのサポートを得ることができる。

(2) 評価

評価は、授業への参加状況 (発言、記入) 15%、日誌 25%、振り返りの文章 (1, 2 枚) 5%としている、そして、事前小論文 (5, 6 枚) 25%、最終小論文 (7, 8 枚) 30%である。

振り返りの文書に関しては、その内容が良ければ5%以上になる場合もある。この他に提出物の締切を1日遅れるごとにマイナス1ポイントとしている。

この評価は、A、A-、B+、B、Cの5段階評価としている。この評価の学生割合は、Aは5%程度、A-からBまでが30%程度である。

授業の振り返りでは、学生は論理的な話より、経験したことを話したがるため、学んだことや理論との繋がりを考えさせ、表現させるのに苦労している。社会活動からの学びを明確に表現できているかどうかを評価している。

討論の際に、おとなしい学生は教員から声をかけて導いているので、学生の殆どは良い評価を受けることになる。

小論文に関しては、理論をどの程度、理解したのかを評価している。最終小論文は、論点、文法、構成、引用の方法、良い具体例を盛り込んでいるかなどについて評価する。

(3) 学生にとっての CBL の意義

豊かな社会で育った学生は、CBL を通して社会で大きなストレスを抱えた人々と触れ合うことで、人間が自尊心を如何に保てるのかについて考えてくる。自尊心や誇りなど、哲学で学ぶ事柄を現実の中で経験することは、より学びが強化され、また、理論を実践に応用することは分析能力が身についてくる。この体験は、彼らに大きな影響を与えているようで、卒業後も CBL での経験した事を感謝する手紙が届くことがある。

2) ディエナ・クック部長の担当教科と CBL

(1) 導入科目と学習内容

導入している科目は、『地域密着型調査研究インターンシップ』。この科目は、調査研究を通して学生の学問的発展と自己成長を図ることを目的としている。また、この調査研究で得た結果は、受け入れ団体の社会問題を解決する取り組みにも繋がることを目指している。

この科目は、通年科目であり、1年生から4年生が履修しており、現在14人の学生が学んでいる。

現在まで、7つの団体とプロジェクト研究を行い、プロジェクト先団体の担当者と学生、教員と協働で調査研究企画書を作成している。体験の事前学習準備として、読むべきものはきちんと読ませる理論学習が不可欠である。課題冊数は、1セメスターで20本、2セメスター目でも追加していつている。

(2) 受入先との調整

社会正義研究・教育・活動センターが、授業開始前に受入先に説明をしている。その際の説明資料として、授業で学生に提供している書類や書物も渡している。

学生には、社会正義研究・教育・活動センターが主催する地域団体を見学するコミュニティツアーに参加して、受入先を選択するための情報を得る機会が与えられている。

過去には助成金を受け、受入れ先に研修費を支払い、受入れに対する講座を行ったが、助成金が終了してからはできていないが、今後は活動先に生涯教育の機会を提供することを考えている。

(3) 学生募集と履修の動機

ジョージタウン大学の学生の殆どは、入学前に社会活動の経験があるため、意欲的な学生がこの科目は履修している。また、過去にこの科目を履修した学生達から話を聞き、履修を希望する学生も多い。

年度初めのオリエンテーションで CBL 科目について説明をするので、そこで情報を確認し学生は履修している。

(4) 評価

評価は、調査研究企画書の実践状況 50%、授業課題 25%、授業の出席 10%、受入団体からの評価 15%（共同研究をした場合の学生評価は、出席の評価から 5%を割り当てる）としている。

まとめである調査研究論文は、最低3回書き直しをさせる。

(5) 危機管理

この活動にあたり、学生が担う責任に関する項目を盛り込んだ合意書を取り交わしている。学生によっては、勝手な行動をとってしまう学生もいるので、このコースで要求されたルールを守り活動することを約束（契約）し、倫理指導を行う。学生は無犯罪証明書も提出している。

このクラスでは、コミュニティパートナーが既に行っているリサーチを行うので、活動に伴うリスクは比較的低い。学生の中には、活動を行う時間が確保できなかったり、活動を始める気持ちの準備ができていない学生がいる。このことを教員は理解し指導しなければならない。

(6) 活動中の学生支援

活動中は、基本的に活動先が学生を支援するので、大学側が関与することはしない。その間は、携帯やメールを使って学生から連絡できるようにし、必要があれば連絡を取る程度にしている。

3) 学生のモチベーションを高めるための工夫

学生は高校時代にサービスラーニングの経験があるので、この科目に興味深くモチベーションも高い。学生の高校時代やこれまでの経験をまずは教員が知ることが、学生のモチベーションを高める意味で大切である。

3. 学内でのCBLの普及啓発

学部によってCBLの説明をオリエンテーションで行っている。ニュースレターやリーフレットなどの発行物を有効に活用した広報も行っている。教員向けには、CBLについてのワークショップを開催し幅広く周知してもらえよう取り組んでいる。

学外では、全国・地域サービス連邦公社の大統領栄誉大学の指名を受けたり、カーネギー財団に表彰されたり、キャンパスコンパクトのフランク・ニューマン・リーダーシップ賞を学生が受けたこともある。同じくトーマス・アーリック市民的社会参画教員賞に教員が選ばれるなど、このような機会は、CBLの価値を学内にも知らせる効果があった。



(ジョージタウン大学の風景)

